

へいそく そびけえ

■曾於市文化財散歩（九）

「椎の木の下」

夏になると思い出すのが、「椎の木の下」である。恒吉春田集落の前に広がる棚田を北から南に一筋に流れている長江川が、



北から臨む恒吉城跡

「椎の木の下」で深いよどみをつくっていた。此処は裏山が十メートルくらいの崖になっていて、その上方に「椎の木」の大木があった。

夏場はなんといっても子ども達にとっては水遊びであるが、海から遠く、海水浴もままならなかった。学校では安全な場所を選んで玉石を積み重ねて堰をつくり、少し深くして看視のもとに水遊びをした。だが、小学生時代は上級生が深みで下級生の頭を押さえたりして悪戯をしても、「椎の木の下」は離れ難

い場所であった。「椎の木の下」はみんなが集まって遊ぶ目印になっていたのであった。

先輩達がそうして遊んだように、私達も夏場は「椎の木の下」で少年時代を楽しんだ事が懐かしく想いだされる。今はその「椎の木」もなく、河川工事により跡地は水田となっている。

その後が恒吉城跡である。恒吉城は中世の山城で、十五世紀から十七世紀初頭に島津氏の家臣山田氏が支配したり、肝付氏や北郷氏が争奪戦を繰り返したところと言われ、今日は市指定史跡にもなっているが、少年の頃は単なる遊べる山としての認識しかなかったように思う。

又、前述の長江川も恒吉城を守る水堀の役割があったのであり、城内には空堀が続いてほぼ五区画できる郭群の大きな構えとなっているが、子ども達はただ単に山道と考えていたようである。

尚、長江川にかかる恒吉太鼓橋は、江戸時代後期の寛政二年（一七九〇）に架橋されたもので、現存する県内最古級の石橋である。岩川と市成を結ぶ街道に架かる要衝の橋で、交通にとって大きな役割があったであろうと思われる。

恒吉の歴史は未だ悠久の時間の中にあると言ってよい。

（曾於市文化財保護審議会委員
久保田 幸男）



恒吉麓を流れる長江川

